
暗殺者、片翼の天使に出会う

よこたて十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗殺者、片翼の天使に出会う

【Nコード】

N6521W

【作者名】

よこたて十

【あらすじ】

灯りの消えた、人のない地でスクアールロが出会ったのは、あまりに長い異国の刀を持つ、人間離れた風貌の黒衣の男であった。

本作は家庭教師ヒットマンREBORN!とFF7のクロスオーバーになります。イタリアのどこかでスクアールロとセフィロスが出会ってしまったとかそんなお話です。時系列としては、リボーンはリング争奪戦前、FF7はニブルヘイム前（セフィロス発狂前）となります。

スクアーロは人のいなくなった田舎の町外れで戦闘を繰り広げていた。

激しくかち合った刃から、火花が散る。

「う、お、おい！　なんだあ貴様?!」

怒声にも似た声で、ひとりの男に向かってスクアーロはそう叫んだ。

スクアーロと対峙するひとりの男。腰ほどまで伸ばした長い銀髪に、黒のコート。あまりに白い肌と薄い緑のかかった青色の瞳に、猫などを連想させる夜行性のような瞳孔という、どこか人間らしくない外見の男であった。

彼が振るう刀は、形だけを見れば日本刀であったのだが、ただの日本刀とは思えない長さである。ぱっと見ただけでも全長三メートルはあることが伺えた。そのため、刀にはあまりにリーチが長く、スクアーロは非常に不利な状況であった。それに速さも重さも加わっているため、スクアーロは刃を捉えて衝撃を打ち止めることに精一杯であったのだ。

しかし、こんな長さの刀がこの世に存在したのか、とスクアーロは別のところで感心していた。これほどの大型の日本刀は初めて目にする。人間の扱うものにしては重さも大きさもありすぎるだろう。一般的ともいえる流派の剣術を柔軟すぎるほどに吸収し続けてここまで上り詰めた一介の（というには少々特殊だが）剣士であるスクアーロには、どう使えばこんな長さの刀を効果的に使いこなせるのかはわからない。というよりも、こんな扱いつらそうな刀を持つと思うたことすらない。これまで、無数の剣術士たちと剣を交えてきたが、こんな怪物刀を使いこなす者は初めてである。剣は長ければ長いほど、扱いつらくなり、使い手の技術が必要だ。ただリーチ

を伸ばしたいだけなら槍を使うのが合理的だといわれる。スクアーロはこの男は余程のもの好きか、変わり者だと見ていた。

だが、いくら扱いづらいいえ、やはり熟練した使い手が使えば、威力は槍の以上のものにもなり得るらしかった。

瞬間、スクアーロの剣は大きく弾き上げられる。その反動のまま、男の刀は二手目を振り下ろしていた。スクアーロはその斬撃から逃れるべく身体をひねったが、この長さの刀から身体を反らすだけでは完全に逃れられない。この男は振り下ろす手前で少し軌道を変えているため、先読みしてかわしてから攻撃、という戦法が取れない。しかも、それには何か法則があるわけでもなく、予測のつかない動きで斬撃を繰り出していた。その上、確実に刃こぼれさせるように振り下ろす。もしかしたら、スクアーロが斬撃を打ち止めることに専念していることが、この男にはもうすでにばれているのかもしれない。このまま、こうして斬撃を受け止めることを続けていけば、確実にスクアーロが不利になる。

相手の動きの法則を読み取りその動きを瞬時に分析し異様な対応力で策を練り相手の弱点をつくことで、落とされることのない戦いを組み立てるスクアーロにしてみれば、予測のつかない動きをされることが一番苦戦を強いられるかもしれない。

もつとも、手許で軌道を変えるなどという、予測のつかない動きをとる流派などきいたことはないし、これだけの相手をしてきても出会わなかったのだから、いないに等しいのだろうが。

本来なら、『こんなタイプの剣技は初めてだ』とスクアーロの戦闘意欲を駆り立てるものになるのだろうが、この男はそれを許さない何かがあった。

今の一撃で、髪の毛の数本と襟が斬り裂かれ、顎の下にじわりと赤く筋が浮かび上がった。皮を数枚切られたらしい。スクアーロの鍛えられた瞬発力をもって避け切るよりも、この男の斬撃のほうがわずかに速いらしい。

このまま、この男の間合いにいるのは不利であると判断したスク

アールは、チツと小さく舌打ちをしながら大きく後ろに飛び退った。斬撃の届かないところまで間合いを開く。

黒衣の男の間合いから抜けると、スクアール口の剣は届かない。そういうときのために、スクアール口には飛び道具が用意されている。こうでもしなければ確実に腕の一本くらいは持つていかれるに違いない。

この男に通じるかどうかは別だが。

後ろに飛び退りながら、空を切り裂くように剣を大きく上に跳ね上げた。その動きによって、仕込み火薬が黒衣の男の方へ飛ぶ。

男の白い顔がにたりと笑を浮かべる。その得体の知れない気配にぞわりと背筋の毛が逆立つのを感じた。

「小賢しい手だな、“プロテス”」

黒衣の男が聞きなれない言葉を唱えた瞬間、突然、光でできた壁のようなものが包む。壁に阻まれた火薬は跳ね返され、届かない。

その壁の手前で、火薬が爆発した。

スクアール口は再び舌打ちをした。

ヴァリアールの剣豪といわれるスクアール口の力量をもってしても、対峙した怪物刀を構える男の人間離れした殺気と気配に圧されていた。

振り上げられた刀が空を大きく切り裂いた。その銀色の軌跡はやはりスクアール口の感触よりも大きく、その斬撃はふたたびスクアール口の黒衣を奪っていった。

一歩間違えば、胴体がまっぶたつになっっていたかもしれない。

冷や汗が一粒、背中をすべり落ちていった。

この男には、スクアール口は勝てないということを直感的に感じ取っていた。『自分の剣こそが無敵だ』と言って聞かない愚かな剣士たちを数えきれないほどに葬ってきたスクアール口にしてみれば、相手はほぼ本気すら出していないのにもかかわらず、自分が負けることを予測しているのは初めてだった。もしかしたら、これは剣の道を貫く者として失格かもしれない。だが、スクアール口にはわかるの

だ。この男が、この国の影で生きる手練の暗殺者が攻撃を仕掛けたとしても、この男を屠ることは不可能なほどに、とんでもない力をその身体に宿していることが。

もしかしたら、彼は人間ですらないのかもしれない。

ひらりと舞う、スクアーロの黒衣の破片を刀を持っていない男の右手が乱暴につかみとった。

「……似ている」

ふと、そう口を開いた男の顔を、スクアーロは啞然として見つめた。

「はあ？」

スクアーロは考えてもみなかった言葉に思わず間抜けな声で聞き返したが、対する黒衣の男のクソ真面目な顔を見て、表情を変えた。「誰と似てるっていうんだあ？」

そう聞き返すと、男は驚いたようにスクアーロの顔を見、それからゆっくりと頭を振った。

「いや……何でも無い。聞き流してくれ」

突然何を言い出すのか、とスクアーロは首をかしげた。

黒衣の男の手からいつの間にか刀が消えているのを見て不思議に思いながらも、戦意がなくなつたと判断し、腕ごと剣と化している片手を下ろし、攻撃する気はないことを示した。

「貴様、名前はなんて言うんだあ？」

黒衣の男は、知らないのか、といたげに眉根をひそめ、スクアーロを見る。

「セフィロスだ。ソルジャー1stクラス」

聞きなれない名前にスクアーロは首をかしげた。

「ソルジャーって尖兵のことかあ？」

セフィロスはスクアーロに聞き返されて、怪訝そうな表情を浮かべる。

「知らないのか？」

「知らねえぞあ」

セフィロスはスクアーロの言葉に黙りこみ、静かに顎のあたりに指をあてた。セフィロスという人物は本来なら、一部を除いて知らない者などいないほどに有名なのだ。それなのに、これだけの力量の剣士がセフィロスの名前を知らないどころかソルジャーのことすら知らないという理由が、セフィロスにはわからなかった。

「まあいい。お前の名前は？」

「スペルビ・スクアーロ、暗殺部隊ヴァリアーの剣士だぜえ」

その言葉を聞いたセフィロスは小さく笑う。

「そうか、暗殺者か……」

「なんだあ？」

スクアーロの言葉を反芻したセフィロスの顔を、スクアーロは怪訝そうに見遣る。

「どうやら俺はとんでもないところにきてしまったようだな」

なぜか笑い始めたセフィロスの顔を見たスクアーロは眉をひそめる。

「何がおかしいんだあ？」

わけがわからないスクアーロはセフィロスの顔を見つめた。

「どうやらこの人間と俺は全く別の生き物だ」

スクアーロにしてみれば全く意味の分からないその言葉に首をかしげることしかできなかった。

そんなスクアーロを他所にセフィロスは楽しそうに笑い続ける。

「おかげで少し気が楽になった」

何を言っているのか、と怪訝そうにスクアーロは眉根をひそめる。

「……何者なんだあ、貴様は」

「気にするな、説明したところで理解ができないだろう」

暗に馬鹿だと言われているようで、快いものではなかったが、反論ができずにスクアーロは黙りこんだ。

普通の人間なら見とれるほどの、気高くありながら不遜な表情を見て、スクアーロはザンザスを思い出す。大きな傷のある、見た者を無条件に慄かせる、お世辞にも美しいとはいえないあの顔には似

ても似つかぬ、またとないほどにひどく整った白い顔であるにもか
かわらず、あの男を思い起こさせる理由をスクアーロは考えあぐね
ていた。

「それで、お前……スクアーロといったか」

不意に名前を呼ばれて、スクアーロは顔を上げる。

「なんだあ？」

「出会ったのも何かの縁だ。お前にこの地を案内して欲しいんだが
……構わないだろうか」

「ああ、いいぜえ」

スクアーロはうなずき、セフィロスに背を向け、歩きはじめた。

それから、ふと気になってスクアーロはセフィロスの方を振り返
る。

「それで、貴様……セフィロスっていったかあ、これからどうする
つもりなんだあ？」

「これから考える」

その言葉を聞いて、スクアーロはこの男への見方を変えた。生真
面目だと思っていたが、どうやら、そうでもないらしい。

「……貴様、思ったより大物なんだなあ」

スクアーロのどこか呆れているようにも見受けられるその表情を
見て、セフィロスは不思議そうに小さく首をかしげる。

スクアーロはそんなセフィロスを他所に、これからのことを考え
ていた。これだけの力量の持ち主なのだから、ヴァリアーに迎え入
れることも全くあり得ないことではない。しかし、あの気性の荒い
ザンザスがすなりと受け入れるかどうかは、また別の問題だった。

これから日本へ出向き、守護者のリングを奪うことを思い出し、
感情が高ぶっているのに気付いたスクアーロは、片頬で笑った。

この男は、使えるかもしれない。

(後書き)

なんでセフィロスをチヨイスしたのかといわれると、なんとなく外見が似てたからとかそんな理由です。続きは考えていませんが希望があれば書くかもしれません。しかし執筆者の気分次第です。ふたりの二人称がよくわかってません。申し訳ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6521w/>

暗殺者、片翼の天使に会う

2011年10月18日03時30分発行